

5 参考資料

(1) 「国語総合」「古典A」「古典B」における古典の指導

以下、古典を教材として扱う科目である「国語総合」「古典A」「古典B」の科目の目標及び指導事項を整理する。古典を扱う授業においては、これらの科目の趣旨にあった授業展開を考えることが必要である。

ア 「国語総合」

●科目の目標

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

●古典の学習に関わる指導事項

C 読むこと

(1)ア 文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読むこと。

イ 文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりすること。

ウ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。

エ 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりすること。

オ 幅広く本や文章を読み、情報を得て用いたり、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしたりすること。

〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕

(1)ア(ア) 言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気付き、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること。

(イ) 文語のきまり、訓読のきまりなどを理解すること。

イ(ア) 国語における言葉の成り立ち、表現の特色及び言語の役割などを理解すること。

「国語総合」は総合的な言語能力を育成することを目指した科目であり、その指導に当たっては、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの言語活動を相互に密接な関連を図りながら実践していくことが必要である。したがって、「国語総合」における古典の指導においても、例えば、話したり書いたりする表現活動を古典の文章を読むことと関連させて行ったり、課題についてそれぞれの考えをまとめ、その成果を発表したりするなどの多様な言語活動を、適切な指導と評価の計画の下に実践していくなど、指導上の工夫が大切となる。

古典の教材に関しては、原文のみを取り上げるのではなく、生徒の実態に応じては、学習に際して読みにくい漢字や熟語に読み仮名を付けたり、難解な部分には注釈、傍注、解説、現代語訳などを適切に用いたりする配慮が必要である。また、古文と漢文が均衡を欠いたりすることがないように、教材は偏りなく選定することになっている。

授業においては、古人のものの見方、感じ方、考え方に触れ、それを広げたり深めたりする授業を実践し、まず、古典を学ぶ意義を認識させ、古典に対する興味・関心を広げ、古典を読む意欲を高めることを重視する必要がある。

イ 「古典A」

●科目の目標

古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を読むことによって、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる。

●指導事項

(1)ア 古典などに表れた思想や感情を読み取り、人間、社会、自然などについて考察すること。

イ 古典特有の表現を味わったり、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解したりすること。

ウ 古典などを読んで、言語文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について理解すること。

エ 伝統的な言語文化についての課題を設定し、様々な資料を読んで探究して、我が国の伝統と文化について理解を深めること。

「古典A」は我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成することを目指した科目であり、その指導に当たっては、生徒が古典を読む楽しさを味わったり、伝統的な言語文化に触れることの意義を理解したりすることを通して、古典などへの関心を高めていけるよう、配慮することが必要である。したがって、「古典A」における古典の指導においては、語句や文法、現代語訳の学習のために過度に時間を取られることで、豊かな古典の世界に触れる前に生徒を古典嫌いにしてしまうことのないよう、教材や指導の方法を工夫し、古典の世界に楽しく触れることができる授業を展開することが大切となる。また、我が国の伝統と文化について理解を深める学習においては、生徒自身に考えさせたり探究させたりする学習活動が重要なものとなる。

授業で扱う教材に関しては、古典や、古典に関連する近代以降の文章も含め、まとまりのある文章を中心に上げる。その際には、指導のねらい、生徒の興味・関心、指導の段階や時期などに配慮し、親しみやすく効果的なものを教材として用いることが大切である。また、生徒の実態や興味・関心などに応じて内容の取扱いに幅をもたせ、指導上の様々な工夫ができるよう、古文と漢文の両方を取り上げて指導してもよいし、古文だけ若しくは漢文だけを取り上げて指導してもよいことになっている。

授業においては、古典や古典に関連する文章を読むことを通して、古典の中の人間の生活や人生を知り、そこから自らの生き方を見つめ直すとともに進むべき方向を模索しようとする態度や、古典などの表現から自らの思考や感情を表現する様々な方法を見だし、表現に生かそうとする態度などを育成することに留意することが大切である。

ウ 「古典B」

●科目の目標

古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる。

●指導事項

(1)ア 古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解すること。

イ 古典を読んで、内容を構成や展開に即して的確にとらえること。

ウ 古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。

エ 古典の内容や表現の特色を理解して読み味わい、作品の価値について考察すること。

オ 古典を読んで、我が国の文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について理解を深めること。

「古典B」は、古典を読む能力を養うとともに、思考力を伸ばし、感性や情緒をはぐくみ、古典を通して人生を豊かにする態度を育成することを目指した科目であり、その指導に当たっては、古典を読む能力を養うとともに、生徒が古典についての理解や関心を深めていけるよう、配慮することが必要である。したがって、「古典B」における古典の指導においては、語句の意味の理解や文の現代語訳といった文章の表面的な意味をとらえる学習だけで終わらせず、内容の理解の上に立って、生徒が豊かな古典の世界に触れ、自身のものの見方・感じ方・考え方を広げ深めていけるよう、授業の展開を工夫していくことが大切となる。

授業で扱う教材に関しては、生徒の発達の段階や指導の時期に即応して、長短難易様々なものをバランスよく取り上げ、その配列を工夫するなどの配慮が必要である。また、古文と漢文は両方を取り上げることになっている。古文と漢文のいずれか一方に多くの時間をかけたり、取扱い方に深浅が生じたりすることがないように配慮し、全体としてバランスよく指導する必要がある。

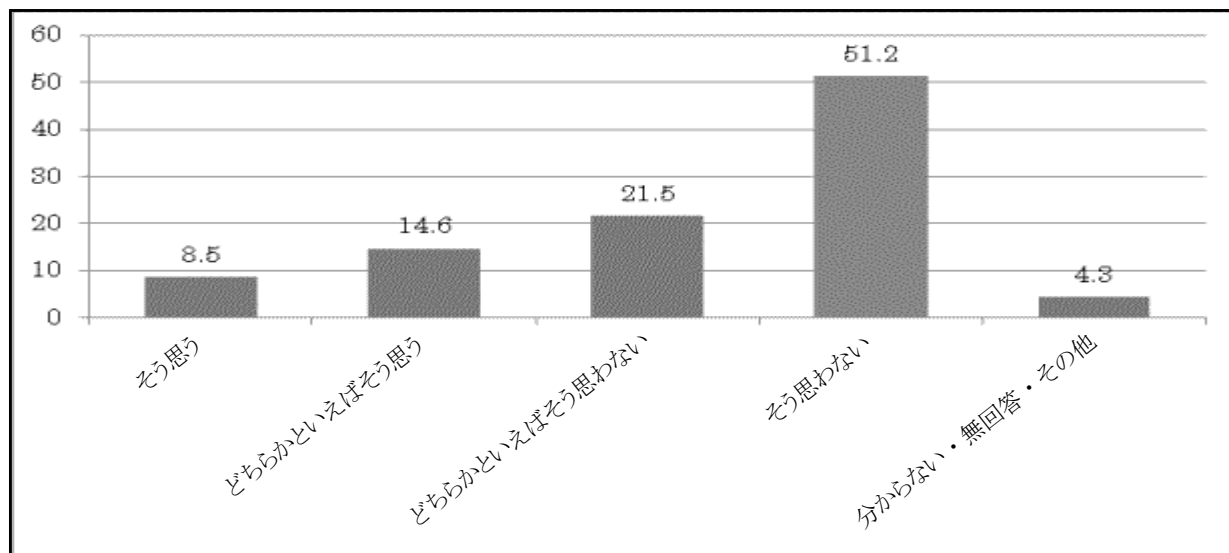
授業においては、生徒自身が古典の価値について考えを深め、我が国の伝統や文化などについて考えを深めていけるよう、留意することが大切である。

(2) 平成17年度教育課程実施状況調査「生徒質問紙調査」「教師質問紙調査」における、古典に対する
生徒・教師の意識

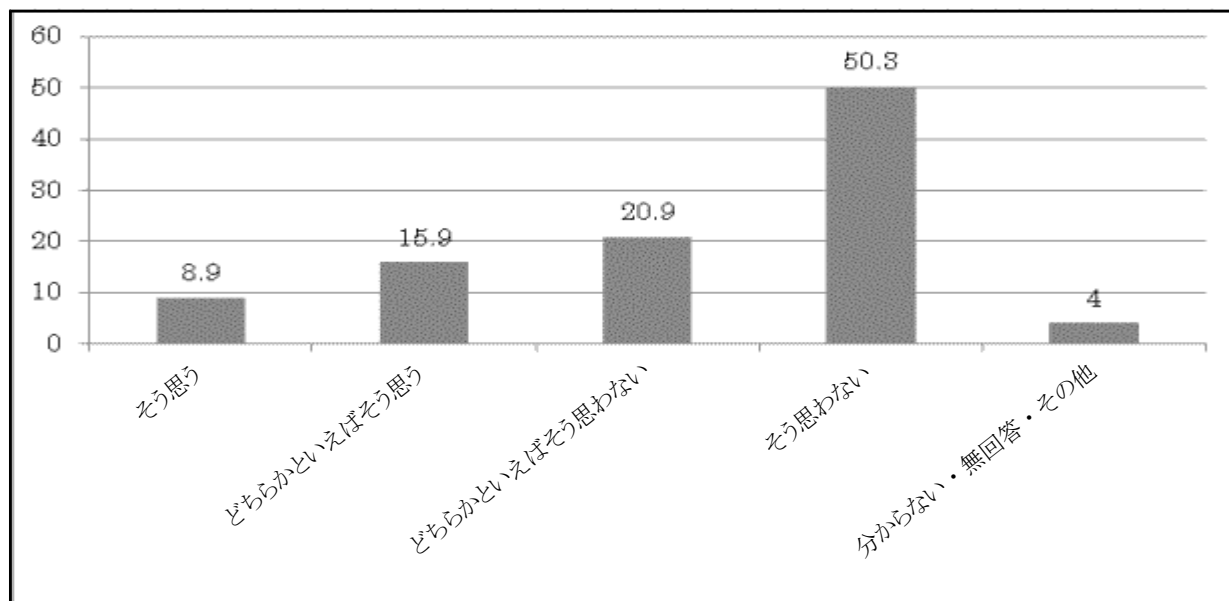
高校における古典の指導を取り巻く現状を知る資料の一つに、平成17年度教育課程実施状況調査※1がある。この調査における「生徒質問紙調査」「教師質問紙調査」の回答から、生徒や教師が、古典の授業に対してどのような意識を抱いているのかが分かる項目を整理したものが、以下である。

【「生徒質問紙調査」より】

●「古文は好きだ」という質問に対しての生徒の回答（数字は%で表した）



●「漢文は好きだ」という質問に対しての生徒の回答（数字は%で表した）



※1 平成17年11月10日実施。調査対象は国・公・私立高等学校(全日制課程)(中等教育学校の後期課程を含む)の第3学年。無作為抽出。全員が履修している科目の場合、1科目1問題冊子あたり、生徒1万6千人が調査対象となるよう、原則1学科2学級を抽出して実施された。

【「生徒質問紙調査」より】

- 「調査時点までに文語文法を指導している」と答えた教師※₂に指導を受けている生徒のうち、「文語文法を理解すること」に対して、
 - ・「よく分かった」と回答した生徒は17.2%、「よく分からなかった」と回答した生徒は36.3%であった。（「無回答」・「その他」は46.4%）
 - ・「好きだった」と回答した生徒は12.9%、「きらいだった」と回答した生徒は49.4%であった。（「無回答」・「その他」は37.7%）
 - ・「普段の生活や社会生活の中で役に立つと思った」と回答した生徒は32.9%、「役に立つと思わなかった」と回答した生徒は22.4%であった。（「無回答」・「その他」は44.7%）
- 「調査時点までに漢文の訓読の仕方を指導している」と答えた教師※₃に指導を受けている生徒のうち、「漢文の訓読の仕方を理解すること」に対して、
 - ・「よく分かった」と回答した生徒は24.2%、「よく分からなかった」と回答した生徒は31.5%であった。（「無回答」・「その他」は44.3%）
 - ・「好きだった」と回答した生徒は20.9%、「きらいだった」と回答した生徒は43.8%であった。（「無回答」・「その他」は35.3%）
 - ・「普段の生活や社会生活の中で役に立つと思った」と回答した生徒は19.9%、「役に立つと思わなかった」と回答した生徒は37.3%であった。（「無回答」・「その他」は42.8%）

【「教師質問紙調査」より】

- 「調査時点までに文語文法を指導している」と答えた教師※₂のうち、「文語文法を理解すること」に対して、
 - ・「生徒にとって理解しやすい」と回答した教師は6.1%、「生徒にとって理解しにくい」と回答した教師は71.1%であった。（「無回答」・「その他」は22.9%）
 - ・「生徒は興味を持ちやすい」と回答した教師は4.4%、「生徒は興味を持ちにくい」と回答した教師は53.7%であった。（「無回答」・「その他」は41.9%）
- 「調査時点までに漢文の訓読の仕方を指導している」と答えた教師※₃のうち、「漢文の訓読の仕方を理解すること」に対して、
 - ・「生徒にとって理解しやすい」と回答した教師は34.4%、「生徒にとって理解しにくい」と回答した教師は34.6%であった。（「無回答」・「その他」は30.9%）
 - ・「生徒は興味を持ちやすい」と回答した教師は34.4%、「生徒は興味を持ちにくい」と回答した教師は25.3%であった。（「無回答」・「その他」は40.3%）

※₂ 「調査時点までに文語文法を指導している」と答えた教師の割合は、調査対象となった全国語教師の97.9%であった。

※₃ 「調査時点までに漢文の訓読の仕方を指導している」と答えた教師の割合は、調査対象となった全国語教師の99.8%であった。

これらの回答から分かるのは、生徒や教師が古典の授業に対して抱いている意識のうちの一部である。しかし、この回答だけをとってみても、生徒が古典の学習に対して強い苦手意識を抱いていることは十分に分かる。一方、教師の側も、文語文法や漢文の訓読の仕方は生徒にとって「理解しにく」く「興味を持ちにくい」ものであると、問題意識をもっていることが分かる。

（３）小・中学校における「伝統的な言語文化」を扱う授業

従前の学習指導要領では、小・中学校の国語科の内容は「Ａ 話すこと・聞くこと」、「Ｂ 書くこと」、「Ｃ 読むこと」の３領域及び〔言語事項〕で構成されており、古典作品を授業で扱う際には以下のような指導が行われた。

●小学校

古典作品を教材として

- ・ 「Ｃ 読むこと」の指導事項を指導する。
- ・ 第５・６年においては「言語事項」「エ 文語調の文章に関する事項」の（ア）「易しい文語調の文章を音読し、文語の調子に親しむこと」として、３領域の指導を通して指導する。

●中学校

古典作品を教材として「Ｃ 読むこと」の指導事項を指導する。

つまり、従前の学習指導要領においては、授業で教材として古典作品を扱ってはいても、その授業は主として「読むこと」の指導の一環として行われるものであり、古典作品に表現された様々な思想や感情などを取り上げる指導は、しにくい状況があった。

新学習指導要領では、小・中学校の国語科の内容は「Ａ 話すこと・聞くこと」、「Ｂ 書くこと」、「Ｃ 読むこと」の３領域と〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に改められた。この〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕は、従前の学習指導要領における〔言語事項〕で指導していたことと、新設された「伝統的な言語文化」とで構成される。この「伝統的な言語文化」に、古典は含まれる。「伝統的な言語文化」を扱う授業では以下のような指導が行われる。

●小学校

古典作品などを教材として、「Ａ 話すこと・聞くこと」、「Ｂ 書くこと」及び「Ｃ 読むこと」の各領域の指導を通して以下の事項を指導することを基本とする。

なお、知識・技能の定着を図るために、まとめて単元化して扱ったり、特定の時間を確保して繰り返し指導したり、学期や学年を超えて指導したりすることもできる。ただし、特定の事項をまとめたり繰り返したりする学習は、形式的・機械的な学習になりやすいので、児童が興味や関心をもって学習を継続できるような工夫が大切である。

小学校第１学年及び第２学年	小学校第３学年及び第４学年	小学校第５学年及び第６学年
ア 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。	ア 易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。 イ 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。	ア 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。 イ 古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

●中学校

古典作品などを教材として、「A 話すこと・聞くこと」、「B 書くこと」、「C 読むこと」の指導を通して以下の事項について指導する。

なお、古典に関する基礎的・基本的な内容、言葉の性質の類似性や系統性などについて、生徒の興味・関心や学習の必要に応じ、ある程度体系付けてまとめた知識を得させるような指導もできる。

中学校第1学年	中学校第2学年	中学校第3学年
ア 文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。 イ 古典には様々な種類の作品があることを知ること。	ア 作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと。 イ 古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること。	ア 歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと。 イ 古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書くこと。

「伝統的な言語文化」の指導は、小・中学校のどちらにおいても3領域を通して指導することが基本ではあるが、知識をまとめて指導したり、繰り返して指導したりすることが必要なものについては、特にそれだけを取り上げて指導することもできる。また、「伝統的な言語文化」が設けられたことにより、必要であれば古典作品に表現された様々な思想や感情などを取り上げる指導にも踏み込めるようになった。

このように、今回の改訂では、小・中学校においても古典を教材とする指導が充実されることになる。しかし、それは、高等学校で行っていた古典の指導を小・中学校で前倒しして行うということではない。小・中学校における「伝統的な言語文化」の指導の主眼は、あくまでも「我が国の言語文化に親しむ態度を育てたり、国語の役割についての理解を深めたり、豊かな言語感覚を養ったりすること」にある。そして、これらの指導が目指すのは、我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成することであり、小・中学校での指導を通して生徒に育まれてきたそれらの資質は、高等学校における古典の指導を通してさらに高めていくことになる。

(4) 新学習指導要領における国語科改訂の要点

ア 国語科の目標

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

高等学校国語では、今回の改訂においても言語の教育としての立場を重視し、社会人として生きるために必要とされる国語の能力の基礎を身に付けるという基本的な理念を継承している。したがって、教科の目標については、小学校及び中学校との系統性を重視するため、想像力を伸ばすことについての記述を新たに加えているほかは、これまでと同様である。

イ 高等学校国語科の改善に関する具体的事項

●中学校までに培われた国語の能力を更に伸ばし、社会人として必要とされる国語の能力の基礎を身に付けることができるようにするとともに、生徒一人一人の能力・適性、興味・関心に応じた多様な学習が行われるよう、各科目の構成及び内容を次のように改善する。

(ア)「**国語総合**」は、現行の「国語総合」の内容を改善したものとする。実社会で活用できる国語の能力を身に付けるため、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの学習が総合的に行われるよう、内容を改善する。

その際、特に、文章や資料等を的確に理解し、論理的に考え、話したり書いたりする能力を育成することや、我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度の育成を通して、感性や情緒をはぐくむことを重視する。

(イ)「**国語表現**」は、現行の「国語表現Ⅰ」及び「国語表現Ⅱ」の内容を再構成したものとする。「国語総合」の学習を踏まえ、文章や資料等を的確に理解し、論理的に考え、適切に話したり書いたりする力など、実社会で活用することのできる表現の能力を確実に育成するとともに、進んで表現する意欲や現代の国語の向上を図る態度をはぐくむようにする。

(ウ)「**現代文A**」は、近代以降の文章を対象とし「古典A」と対をなす科目として新設する。「国語総合」の学習を踏まえ、生涯にわたって日常的に読書に親しむ態度をはぐくむ。関連して、言語生活の在り方、言語の役割、国語の特質等についても指導し、我が国の言語文化に対する理解ができるようにする。

(エ)「**現代文B**」は、現行の「現代文」の内容を改善したものとする。「国語総合」の学習を踏まえ、近代以降の様々な種類の文章や資料を教材として取り上げ、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの言語活動を通して、読む能力のみならず、読んだことをもとにして考え、判断・評価し、それをまとめて論理的に表現する能力を育成するとともに、文字・活字文化に対する理解が深まるようにする。

(オ)「**古典A**」は、現行の「古典講読」の内容を改善したものとする。「国語総合」の学習を踏まえ、古典の原文（近代以降の文語調の文章を含む）のみならず、古典についての解説文や小説、随筆なども教材として幅広く取り上げ、古典の世界に親しむ態度をはぐくむ。関連して、言語の役割、国語の成り立ちや特質についても指導し、我が国の言語文化に対する理解ができるようにする。

(カ)「古典B」は、現行の「古典」の内容を改善したものとする。「国語総合」の学習を踏まえ、古典の原文や、古典についての評論文などを教材として取り上げ、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの言語活動を通して、系統的に古典に接することができるようにし、古典に対する関心と知識を高め、古典を読む能力を育成する。

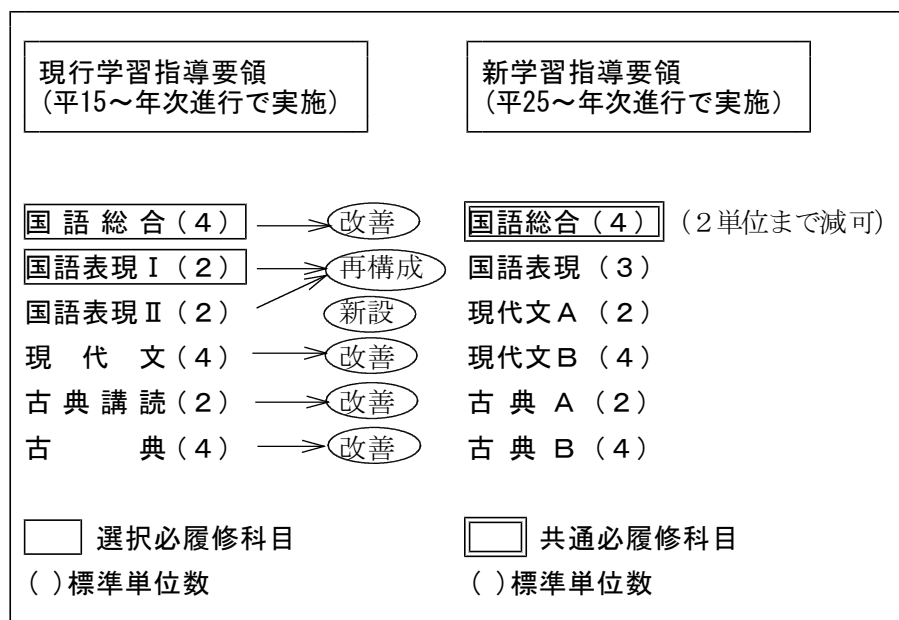
ウ 科目構成の改善

これまでの「国語表現Ⅰ」、「国語表現Ⅱ」、「国語総合」、「現代文」、「古典」及び「古典講読」の6科目から成る構成が、「国語総合」、「国語表現」、「現代文A」、「現代文B」、「古典A」及び「古典B」の6科目から成る構成となった。このうち、総合的な言語能力を育成する「国語総合」が共通必修科目となり、他の5科目は、「国語総合」の内容を、科目の性格、特色に応じて発展させた選択科目となった。

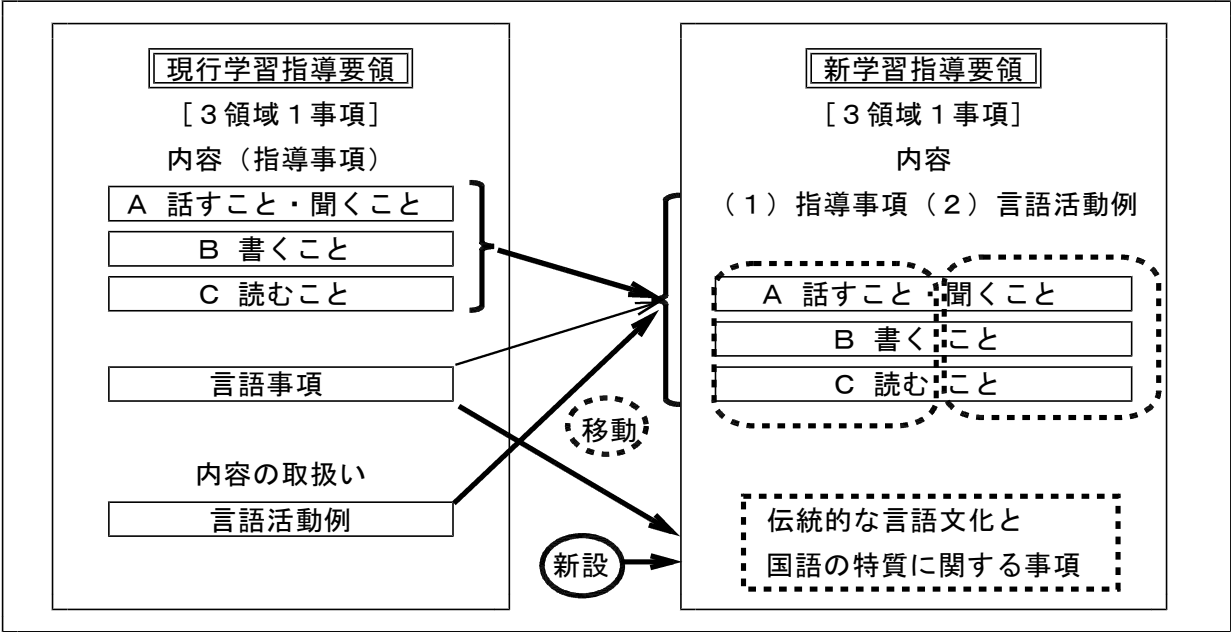
今回の改訂で共通必修科目を置くこととなったのは、答申において「学習の基盤であり、広い意味での言語を活用する能力とも言うべき力を高める国語、数学、外国語については、現在選択必修となっているが、義務教育の成果を踏まえ、共通必修科目を置く必要がある。」と提言されたことによる。この趣旨を踏まえ、「国語総合」が共通必修科目となった。これにより、高等学校国語において指導する内容の共通性を重視することとなった。

表現に関する科目が1科目となったのは、「国語総合」との関係を整理し再構成したためである。また、これまでも2科目で構成していた古典に関する科目に加え、現代文に関する科目も2科目としたのは、生徒の多様性に対応するとともに、言語文化についての指導を重視するためである。

科目構成の改善について図示すると、次のようになる。



エ 内容構成についての改善（「国語総合」）



オ 言語活動例の位置付けについて

言語活動を通して指導事項について指導するという枠組みはこれまでと同様であるが、今回の改訂では、各科目及び領域の内容の（１）に指導事項を示すとともに、これまで内容の取扱いに示されていた言語活動例が内容の（２）に位置付けられ、再構成された。これは、内容の指導において、（１）に示す指導事項を（２）に示す言語活動例を通して指導することを一層明確にするとともに、各教科・科目等における言語活動の充実に資するためである。

なお、内容の（２）に示された言語活動例は、中学校までも含めて既に指導されていることである。また、例として示されているので、これらのすべてを行わなければならないものではなく、それ以外の言語活動を取り上げることも考えられる。

カ 「国語総合」の領域等との関連からみた各選択科目の指導事項

国語総合	A 話すこと・聞くこと	B 書くこと	C 読むこと	（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）
国語表現	（話すこと・聞くこと）	（書くこと）		（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）
現代文A			（読むこと）	（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）
現代文B	（話すこと・聞くこと）	（書くこと）	（読むこと）	（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）
古典A			（読むこと）	（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）
古典B			（読むこと）	（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

（太線枠は、各選択科目において、より指導の中心となるものを示している。）

◇平成23年度高等学校における教科指導の充実 研究協力委員・研究委員（国語科）

研究協力委員

栃木県立宇都宮北高等学校 教諭 佐藤 弘子

栃木県立上三川高等学校 教諭 靱山 史子

栃木県立小山西高等学校 教諭 大塚 寛子

研究委員

栃木県総合教育センター 研究調査部 指導主事 古口 のり子

高等学校における教科指導の充実

国 語 科

学ぶ楽しさを生徒に実感させる古典の指導を目指して
— 苦手意識を緩和し、古典に対する興味・関心を高めるために —

発 行 平成24年3月
栃木県総合教育センター 研究調査部
〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町1070
TEL 028-665-7204 FAX 028-665-7303
URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>